

幼馴染のエリート外交官に
カラダから堕とされそうです

目次

幼馴染のエリート外交官に
カラダから堕とされそうです

番外編 初夜

番外編 幸せな時間

番外編 四年後

幼馴染のエリート外交官に
カラダから堕とされそうです

プロローグ

この恋は、もう二度と望んではいけないと、叶うわけがないと思つていた。

でも、神様。なんのいたずらでしょう？

恋人に盛大に裏切られたこの日、まさかこんなことが待つてゐるなんて――

「楓……こつち見る。誰がこんな顔をさせているのか、ちゃんと見ておけよ」

薄暗いベッドルーム。生まれたままの姿で絡み合うふたり。

いつも余裕たっぷりの、七年ぶりに再会した初恋の幼馴染が、音を立てながら激しく私と繋がつたそこを突きこんでいる。

「あっ、んあ……ああ……」

たまらなく煽情的で、見ていられないくらい淫らなのに、初めて見る奏君の男の顔から目が離せない。

「あんなこと言つて煽つたのは君だぞ？ ちゃんと“約束”は守つてくれよな？ もう絶対に、俺から逃がさない」

律動が早まり、瞼の裏にチカチカと火花が散りだす。

奏君は兄の親友で、私のことをそれはそれは大切に扱つてくれたが、妹としてしか見ていないと思つていた。

いや、違う。

あの日、『妹』でもないと……私の存在は彼の足枷だつたことを知つてしまつたのだ。

思わぬ形で彼の本心を知つてしまつた私は、もう手を伸ばすことを諦めた。

なのに、こんな……抗えないよ。

私を抱きしめる奏君をぎゅうっと抱きしめ返しながら、ふたりで快感の極みへと昇り詰めた。

「楓、俺だけを見ている――」

甘美な魔法の言葉が、私の心の扉をこじ開けようとする。

もう、望んではいけないと思っていたのに、まさかこんなことになつてしまふなんて……

人間誰しも、夢を持つことがあるだろう。

将来この職業に就きたいとか、どんな自分になりたいとか、大なり小なり目標を持ったことがあると思う。

かくいう私、木下楓もそうである。

幼い頃に持った輝かしい夢は途中で挫折したけれども、せめて、唯一の家族である兄を安心させるという夢は、叶えたいと思っていた。

幸せな結婚をして、子供を生んで……

それなのに。

「ああっ、あっ、浩太先輩……もつと、奥、奥、突いてえ……」

「はっ、可愛すぎ……もうこんな悦いんじや、楓なんかとできねえよな——」

いつたい、私は何を聞かされているんだろう……？

立ち尽くしたまま啞然とする。

商社・竹本商事の繁忙期。四半期決算を終えた三月某日の仕事終わりのことだった。

同僚で交際して三年になる、彼氏の相田浩太と久しぶりにご飯でも行けたらと思って、私は終業

後、所属する海外事業部から彼のいる営業部に顔を出した。

ところが、彼の姿はない。彼の親しい先輩から浩太が倉庫の方へ向かつたと聞いて、私はとりあえず行ってみることにした。けれども、そこにも彼の姿はなく、一見無人のようだつた。

あれ？ いない？ なら残念だけど帰ろうかな？ と思って引き返そうとしたところ、奥の倉庫から子猫のような声とかすかな物音がした。

この声と物音で、探していた浩太が、同じ部署の後輩とナニをしているのかわかつてしまつた。

担当する取引先の多くが海外にある彼は、長期の海外出張から帰国したばかり。私の繁忙期や彼の出張も重なり、最後にデートをしたのはもう半年は前だらうか。

それでも社内で顔を合わせれば笑いかけてくれるし、連絡だつて途絶えることなく、結婚をほのめかされていたから期待していたのに……扉の向こう側で今、同じ部署の後輩女子社員に我武者羅が腰を打ち付けている彼がいる。

「はっ、ああ——もう達きそう」

「ああ、だめっ、木下先輩と別れなきや達つちやだめえ……」

「急かすなよ……あいつとのセックスなんて気持ちよくねえし、そろそろ潮時だから——」

甘つたるい声を聞いて、背中が凍りついた。

そんなこと思っていたんだ……

自分でも恐ろしいぐらい冷静になつて身を引いたそのとき、背後にあつた何かに当たつて、カタンと音を立ててしまった。

「誰だ！」

浩太がすかさず動きを止めて反応する。たつた今彼女に囁いていた甘ったるい声とは正反対の、威嚇するような声色だ。

好きで遭遇してしまったわけではないのに、なぜ私が声を荒らげられなければならないのか。

私は心を決めて、目の前の倉庫のドアをゆっくりと開けた。

「か、楓……っ」

浩太はがばっと女子社員から離れ、落ちていた服で濡れた下半身を隠す。

今更そんなことをしても、無駄なのに……

私は大慌てで乱れた衣服を整えている浩太と女子社員を静かに見据えた。

「……もう、潮時でいいよ。会社で堂々とこんなことする人、こっちから願い下げだもの……」

全部聞いていた、とその一言で伝わったのだろう。浩太はサーッと顔を青くして、服を身につけながら急いで駆け寄つてくる。

「か、かえでっ——」

「ふたりともお幸せに」

心にもない言葉を吐き捨て、私は扉を閉めて浩太を阻み、その場をあとにした。

浩太の様子を見るに、さつきのセックスの最中の言葉すべてが本心ではないのかも知れないが、そういうことではない。

不快感と失望感と怒りに心が埋め尽くされ、これ以上彼を前にしていることができなかつた。

この期に及んで私の名前を呼ぶ浩太の声が聞こえたような気がしたけれど、足を止めることなくまつすぐ駅に向かいタクシーを拾つた。

はあ……惨めすぎる。

車窓に映る、今にも泣きそうな顔を見つめた。

垂れ目がちの大きめの二重の目に、高すぎない平凡な鼻。まつすぐなダークブラウンの髪はいつも胸の辺りで切り揃え、ハーフアップにまとめている。

海外企業とのオンライン会議も多いため、服装は常に華やかさと上品さを大切にしている。今日はまだ肌寒さの残る三月の空気に合わせ、淡い色合いのジャケットを羽織り、その下はシフォンブルーとラベンダー色のAラインスカートで身を飾つていた。

美人には程遠いかも知れないけれど、割と前向きで堂々とした性格のおかげで、人間関係はとてても恵まれていると思う。

入社以来、ずっと仲がよかつたふたつ上の浩太とは、「明るくてしつかり者のお前が、ずっと好きだった」という彼からの告白で、三年前に交際をスタートすることになった。

つい一週間前の交際三周年記念には、『今後のために、近いうちにお兄さんとご挨拶でも』なんて、結婚を匂わせるようなメールをしてきて、心配性でちょっとびりシスコン気味の兄・柊兄こと柊は、ようやく私に家族が増えることを楽しみにしていた。

なのに、その裏であんなことをしていたなんて。こんなに、悲しさよりも衝撃のほうが強すぎ

る……

会社からタクシーで十五分ほどの場所にある、アットホームな居酒屋にて。

中身が半分ほどになつたビールジョッキをカウンターに叩きつけた私は、カウンターに突つ伏して愚痴をこぼしていた。

「そりやあ、私にも原因はあるけどさ、さすがにひどすぎる……！ 飲まなきややつてられないよお！」

カウンター越しに和装の叔母・都さんが、じめじめした私を見兼ねて、客に料理を振舞いながら優しく声をかけてくれた。

「会社で浮気する男なんかより、可愛い楓ちゃんを大事にしてくれる男はいっぱいいるわよ。結婚する前にわかつてよかつたじゃない。今日はとことん、飲みなさい」

ここ、居酒屋『ひとやすみ』は、人情に厚い安叔父さんと、気さくで面倒見のいい都さんが経営する店だ。

金曜日の夜のこの店は、会社帰りのサラリーマンでにぎわっている。

両親を亡くした私にとって、『ひとやすみ』は実家のような場所だ。都さんは母のようであるながらも、なんでも話せる親友のような存在もある。

邪魔になることはわかつているものの、都さんの優しさに甘え、ここで愚痴を聞いてもらつていた。

さすがに、彼らが会社でセックストしていたとは言えなかつたけれど……こんな心境で、兄とふたりで暮らすマンションへ帰れば、兄にすぐにバレてしまう。

「楓兄になんて言おう。『楓がようやく結婚かあー！』なんて楽しみにしてくれていたから、きっとガッカリするだろくなあ……そう考えると、言えないよ……」

楓兄は、五歳違いのたつたひとりの家族。

大学病院で小児科医をしており、七年前——楓兄が二十五歳、私が二十歳のときに両親を亡くしてから、これまでずっと私を傍で支えてくれた。

とても優しくて頼れる楓兄だが、昔から妹の私を最優先にして猫可愛がりしてくる……ちよつとシスコン気味なところのある変わり者だ。ぶつちやけ私は、自分の怒り狂つた気持ちよりも、楓兄に知られるほうが心配だった。

「楓君は楓ちゃんの結婚が流れたことよりも、傷ついた楓ちゃんのことを気にすると思うよ？ こんな話を聞いたら、心配するに決まつてるわ」

確かにそうだ。優しい都さんの言う通りなのだけれど……

「それが問題なの……」

「ん？」

「ううん、なんでもないよ」

お客様が呼んでいるよ、と話を逸らし、都さんをそちらに促す。

小走りで客席に駆けつける彼女の背中を見送りながら、大きなため息を呑みこんだ。

心配かけるだろうし、都さんにはこの悩みを相談できそうにないなあ……

私たちの両親は、国際協力機関に所属し、国際的な社会活動を支援する仕事をしていた。

柊兄が生まれてからは国内での勤務が多くなつたらしいが、それでも頻繁に海外出張に行つていた。

私たちがこのお店に預けられることも、都さんに木下家に来てもらうことも少なくなかった。

両親が亡くなったのは、その支援活動中の不慮の事故だつた。

両親を失つた当時、私は両親の影響で外交に携わる仕事に就くことを夢見ていて、エリート官僚を数多く輩出する最難関の国立大学に在学していた。

そこで……両親を失つた悲しみとともに直面したのは、学費の問題だつた。

医師免許を取得して一年ほどだつた柊兄が「楓は心配せぬ勉強しろ」と学費を工面してくれたが、新米の医師が容易にできることではない。国立とはいさざまな制度を利用したところで、負担は大きいものだ。結局は、そういった状況への心苦しさや、両親の死のショックで勉強に身が入らないといった理由で、私は大学を中退してしまつた。だが、未だに柊兄への感謝の思いは尽きない。さらに言えば、現在は、語学力を活かし大手商社・竹本商事に勤めているが、それも柊兄の友人のツテでの就職だつた。いつだつて柊兄は、私を一番に考えて、自分を犠牲にして寄り添つてくれた。

なのに、このままでは——大好きな兄にまた我慢を強いてしまうことになる。
こういうとき、彼がいたら、聞いてくれるのだろうか……

ふと脳裏によぎつた面影を搔き消すように、残り少ないジョッキを呷あおつた。

——ダメダメ！ もう、思い出さないつて決めたんだから。

「——まあ、あれだ、楓ちゃん。浮気男よりも、やつぱり“あいつ”しかいねえつてことじやねえのか？」

話を聞いていたらしい安叔父さんが、調理場から一番近い席でひとりになつた私を小声で励ましてくる。昔から口は悪いが人の心の変化にとても敏感で優しい人なのだ——が、私は口に含んだビールを危うく噴き出すところだつた。

「……っ！」

安叔父さんの言う“あいつ”が誰のことかすぐにはわかつてしまつた。

搔き消した傍から、引っ張り出すのはやめてほしい。

「ははっ……一体何のことやら。それより枝豆追加……」

「何つて、忘れたわけじゃないだろ？ あんなに長い間一緒にいたのによ」

慌てて話題を逸らそうとしたが、情に厚い安叔父さんには伝わらない。むしろ、記憶にスコップを入れ、掘り起こそうとしてくる。おかげで空のお皿を差し出した私の手は、浮いたままになつた。

「俺は奏そういぢ一にも楓ちゃんにも、お互いしかいないと思つていたんだよ。何があつたかわからねえが、義兄さんたちが亡くなつたくらいからずつと会つていないんだろう？ 外交官なんて将来も収入も安定してゐるし、この機会にもう一度会つてみてもいいんじやねえのかい？ 何よりあいつといふときの楓ちゃんが、一番楽しそうだつたからさ」

いろいろと爆弾を投下されて戸惑う。

安叔父さんに悪気はない。むしろ私を心配してくれているのだ。けれども、癒えない傷跡を針で刺されたような気持ちになり、ぐつと言葉に詰まつた。

そんな、こと……

「ふふ、心配ありがとう、安叔父さん。私は大丈夫だから」

だけど、ここは変に否定するよりも、取り繕うのに限る。安叔父さんは、たまに気が利きすぎるというか、お節介を焼くときがあるから、触れられたくないことに関しては、隠してしまつに限るのだ。

「——つて強がると思つて、その新たな恋の手配はもうしておいたぞ？」

けれども、その瞬間。話が思わぬ方向に向かつてしまい、私は「へ？」と首を傾げた。

手配……？

「……え？」

何やら、背中がひんやりしてきたぞ。

「さつき、夜勤に出る直前の柊から、楓ちゃんがこっちに来てないか？ つて連絡があつたんだよ。楓ちゃんが失恋で心を痛めていると話したら、自分は今から夜勤だから、すぐに“親友”を迎えてに行かせるつて言つてたんだ。それつて、あいつのことだろう？ 一刻も早く来させると伝えておいたぞ」

安叔父さんは「これぞ、復活愛！」なんて決め顔をしながら、刺身包丁で華麗に魚を捌いている

が、私は気が遠のくような気分になつた。

——なんてことをしてくれたんだ……そもそも、なんで、柊兄に全部言つちゃつたの……！ うまく誤魔化すつもりだつたのに！ それに、『彼』が迎えに来る……！

失恋の痛手なんて、どこかへ吹つ飛んでいつてしまいそうだ。

柊兄は、今夜は夜勤のため病院に泊まりこみで、いつもいいと言つても来る迎えに来られない。けれども、どうしてこのタイミングで、こうなつてしまふのか。

花吹雪でも出しそうなほど歓喜する安叔父さんを「なんで言つちやつたの！」と責めたい気持ちにもなるが、すべてが安叔父さんのせいではない。確かに余計なことを話してくれたが、『彼』のことに関しては偶然の不運なのだ。ぐるぐると目を回しながら、こうしてはいられない……と、咄嗟に代金もとい迷惑料を財布から出し、バッグを持つて立ち上がつたそのとき。さらに困つた事態になつた。

「……面白い話をしているな。俺と楓がなんだつて？」

背後から……お腹の奥に響く、甘くて少しだけ意地悪な声が私の鼓膜を震わせた。ひゅつと息を呑む。

高すぎず、低すぎず、私の意識をいつも簡単に搔つ攫つていくこの声を、私は何年経つた今でもしつかり覚えていたらしい。振り向かなくても、声の主がわかつてしまつた。視線を声のする背後に向けると、まず視界に飛びこんで来たのは、磨き上げられたピカピカの黒い革靴。それから細身のオーダーメイドの三つ揃いスーツをまとつた、スラリとした体躯。ほつそ

りとした顎^{あご}。それから、高く通った鼻筋に、意思の強さを窺わせる鋭くセクシーなアーモンドアイ。そんな左右均等の甘いマスクに、少し無造作に見える緩く癖のついた黒髪。そんな彼の容貌が、すれ違う誰をも魅了^{めいりよく}してしまうことを私は知っている。

「奏、君……」

柔らかく微笑まれて、きゅっと胸が痛いほど締め付けられた。

「久しぶりだな。楓」

こみ上げるいろんな感情を押し殺し、「ヒサシブリ」とどうにか笑みを浮かべた。

「聞いていると思うが、柊の代わりに迎えに来た。……ん？ もう、帰る準備できているのか、なら帰るぞ、送つていく」

「えつ……ちよつと」

奏君はそれだけ言うと、早速私の手を引いて安叔父さんに声をかけた。

ここで帰宅準備万端^{あた}なのが仇^{あだ}となるとは思わなかつた。

「叔父さん、お久しぶりです。楓を回収していきますね」

昔から面倒見のいい彼は、柊兄と同じくらい心配性で、結構強引なところがある。でも、今日ばかりはちよつと待つてほしい。心が追い付かない。

「おお！ 来たか、奏一！ やっぱり柊の親友つてお前のことだったか。ちよつと見ないうちに男の色気まで身につけやがつて！」

「まあまあ、芸能人顔負けだわ……」

ミーハーな都さんが、安叔父さんの言葉につられてやつてきて、目をハートにして奏君を見上げている。久しぶりの再会に、ふたりはとても嬉しそうだ。

そして、店内のあらゆるところから、奏君は熱っぽい視線を注がれていた。

この人気ぶり、昔から変わらない。

背が高くて整つた顔立ちの奏君は、どこに行つても視線を集めの存在だ。

「そんなことないですよ。今日は楓のことを早く休ませたいので、失礼しますね。後日またゆつくり顔を出しに来ます」

奏君は爽やかに謙遜し、私の肩を抱くと「行こう」と微笑んで、『ひとやすみ』をあとにした。

——なんでこんなことになつてしまつたのか……。もう、会うつもりはなかつたのに……

◇◇◇

九条奏一こと奏君は柊兄の親友で、私の初恋の人だつた。

彼と最後に会つたのは、彼のフランスへの赴任が決まつた七年前。

一步前を行くスースに包まれた彼の広い背中を見つめながら、出会つた日のことを思い出す。

初めて会つたのは幼稚園にいた四歳のとき。

当時、小学校で柊兄と意気投合した彼がうちに遊びに来たのだ。

その整つた顔立ちに、幼いながらも見惚れてしまつたのをよく覚えている。

品のある佇まいと、優しい笑顔。本当に王子様みたいだつた。

でも、王子様だと思ったのは最初だけ。柊兄に連れられ頻繁にうちに遊びに来るようになつた奏君は、年の離れた私にも名前で呼ばせてくれて、気さくに遊んでくれた。

自信家で意地悪なところもあつたけれど、優しく勉強を教えてくれたり、転んで怪我をしたときには丁寧に手当でをしてくれたりして、私が彼に恋するまでにそう時間はかからなかつた。

両親にとつても彼は家族同然の存在となつていつて、安叔父さんや都さんとも顔を合わせる機会が多く、顔見知りとなつた。

そして、当時の私と彼は、同じ方向の夢を抱いていた。

『へえ、楓は外務省で働きたいのか』

小学校高学年の頃。私は、その頃から両親の影響で、日本と海外を繋ぐ仕事に就くことを夢見ていた。

『うん……海外と日本を繋ぐ手助けをしたい。お父さんとお母さんみたいに、日本だけじゃなく、世界中の人と関わる仕事がしたいんだ』

読んでいた小説の影響もあつた。だけど、両親のように国と国を繋ぐという大きな役目にとても心が惹かれた。

決意をこめて口にした私に、奏君が嬉しそうに提案をしてくれた。

『なら、俺が家庭教師をしてやる。俺は、親の勧めで外交官を目指すつもりなんだ』

『……そうなの？』

『ああ、俺には難しくないが、楓は心配だから勉強を叩きこんでやる』
『嬉しいけど、言い方〜！』

この頃、有名な進学校のトップにいた高校生の奏君の進路は、しつかりしていた。
ご両親が大企業の役員で、幼い頃から英才教育を受けていた奏君は、飛び抜けて頭がいいと柊兄から聞いている。この手を取らない選択肢はない。

そうして私たちの二人三脚での勉強が始まつた。

だけど、歳を重ねるにつれ、私の奏君への思いは苦しくなるほど募つていつた。

『奏君が、好き……』

この関係性を壊したくない私は、必死でこの気持ちを隠した。けれども、彼のおかげで大学に合格した十八歳のとき、抑えられない気持ちが口からこぼれてしまつた。
言うつもりはなかつたし、今思えば黒歴史だ。当時二十三歳で、霞が関で勤務していた彼にとつて、私はただの子供でしかないのに。

『ん？ ……何か言つたか？』

頭を撫でられ、完全に“幼馴染の妹”としての対応。

聞こえないフリをして、一線を引かれたのだと思つた。傍を車が通つたせいと思えなくもないが、そんな都合のいいことはないだろう。

私は、この関係が壊れて二度と会えなくなるくらいなら、思いを秘めて妹として彼の傍にいたいと思つた。

この先も“妹”であり続けることを、甘んじて受け入れたのだ。

でも、それは間違っていた。

両親が事故で他界し、環境が変わったあの頃。私は、思わず形で彼の本心を知つてしまつた。

『楓のことは……妹だなんて、思つてない。それどころか……正直、今の関係が足枷になつていて、苦しいんだよ』

奏君が、私のいないところで、友人たちに話しているのを聞いてしまつた。

“妹”であることが彼の足枷になつていた。彼にとつて大切な女性になることも、幼馴染でいることも許されない。優しい奏君は、寄つてくる私を拒めなかつただけなのだ。

だから私は、思い続けることを諦めた。

『楓。俺と一緒に、フランスへ――』

『ごめん。――私は奏君とは行かない。もう大丈夫だから心配しないで。――もう私に構わず、自分のために時間を使って……幸せになつてね』

さんざんお世話になつたのに、ひどいことをしたと思う。

それでも、私は……差し伸べられた彼の手を拒むことしかできなかつた。



「本当に、久々だな」

奏君は、近くに停めてあつた柊兄の大きなSUVに私を乗せると微笑む。車はフランスの自宅にあるらしく、柊兄から借りたようだ。

会わぬ間に大人の魅力を増した彼は、最後に会つたときの何倍もカッコいい。私は笑顔で平静を装つた。

「迎えに来てくれてありがとう。柊兄がいきなりごめんね」

もう、あれから七年。私にとつて渡欧する彼を拒んだことは大きな出来事となつていて、彼の記憶にはうつすら残つてている程度だろう。あの日、彼は「わかつた、じゃあな」と言つて、フランスへと旅立つたのだ。

笑顔で話しかけてくる彼に、戸惑いながらもこれまで通り接した。

「男にフラれて飲んだくれている妹を迎えて行けとは、柊のやつ、相変わらずシスコンだな」「……シスコンじゃなくて心配症ね。奏君は、いつ帰国したの？」

一応、柊兄の威厳を守りながら、彼の動向を尋ねてみる。

「数日前だよ。この春から霞が関に帰つてくるから、その準備のために」
相変わらず気さくな彼に安堵する一方で、鼓動が一気に加速する。

――奏君が日本に帰つてくる。

夢を叶えた奏君は現在、キャリア外交官として働いている。

数年おきに海外の在外公館勤務と日本の外務省本部勤務を繰り返すのだが、二年間の在外研修とフランス総領事館での五年間の勤務を終えた彼の拠点は、四月からこちらになるようだ。

通常なら在外勤務は三年ほどだと聞くけれど、奏君の場合はフランス総領事館の重要なポストを任せられたらしく、その任期が延びたのだという。彼の堅実な性格と語学力を思えば、納得がいく。

「……また世話になるだろうが、よろしく」

関係を築こうとするような口ぶりに激しく戸惑う。

七年前、確かに私は彼を拒んだが、その後一切私たちとは会うことも連絡を取り合うこともなかつた。取ろうと思えば取ることだつてできたのに。

それがやはり奏君の本音で、私のしたことは間違つていなかつたと思つたのだが……

「はは、もしかして、またうちでご飯食べようとしてる？」

きっと、本気なわけがないよね？」

「楓の作る料理、うまいからな。まあ、おばさんのには敵わないが」

「……どういうわけか、本気のようだ。動搖しそうになつたがどうにか堪えた。

「そう言いながら何回もおかわりしてたくせに……」

私が口を尖らせてみせると、奏君は昔みたいに人懐っこい顔でケラケラと笑つた。

海外をあちこち訪れていた母の作る料理は、さまざまの国料理を味わつてきただけあって、お世辞を抜きにしてとても美味しかつた。亡くなつてからは私が料理を担当しているが、やはり母の味は越えられない。

奏君はよく、私の料理を食べて今みたいなやり取りをしたあとに、結局は「嘘、嘘。世界一うまいよ」と甘やかすように、からかうように言つていたつけ。そう……奏君は、本当に優しいのだ。

「——でも、よかつたよ……元気そうで」
彼の考えていることがわからなくて、複雑な気持ちになつていると、奏君は車を走らせながら突然そんなことを言う。

「え？」

目を瞬かせた。

「……彼氏と別れたんだろう？」

ハッとした。浩太には悪いが、浩太との破局は奏君との再会という衝撃により、すっかり頭の片隅に追いやられていた。もちろん、許せないし怒りや悔しさはこみ上げてくるが、不思議と気が減入るほどは悲しんでいないのだ。三年も交際したのにひどい女だと思われるかもしれないが、あんな乱れきつた場面に遭遇してしまつただけに、浩太から心がスッと離れたのを感じている。それより心配なのは――

「別れたよ。確かに別れたけど、今は、柊兄のことのほうが心配になつてるかも……」

「柊？」

奏君なら、いい助言をくれるかもしれない。

本音を言えば、ずっと彼に相談できたらいいのについて思つていた。

車はいつの間にか私と柊兄の住むマンションの近くのパーキングに停車していて、奏君は真剣な眼差しを向けて聞いてくれていた。

私は、心配そうに私を見る奏君に、ここのことろずっと悩んでいたことを打ち明けた。

「柊兄、私には言つてくれないけれど、彼女いるよね？ その……盗み聞きするつもりはなかつたんだけれど、たまたま聞いちゃつて——」

奏君は綺麗な目を大きく見開く。

彼女の存在に気づいたのは、まだ両親が生きていた頃だろうか。

見るつもりはなかつたのだが、たまたま柊兄の後ろを通つたとき、デートの約束をしている初々しいメッセージが見えてしまつた。

身内最員をするわけではないけれど、ひょうきんで物腰が柔らかく、整つた顔立ちの柊兄は昔から女性にモテていた。ただ、誠実で眞面目な性格で、両親が海外へ行く際に私の面倒を任されていたこともあり、恋人や女性の影はまったくなかつた。だから驚いたものの、それ以上に柊兄にとつて大切な人が増えたことが本当に嬉しかつた。今でもよくバルコニーで楽しげに電話をしていて、順調に続いているようだ。

けれども、一週間前に偶然聞いてしまつた。

『結婚は、もう少し待つてほしい』

夕飯ができたと声をかけようとした私の動きは、ピタリと止まつた。

『楓をどうしてもひとりにしたくないんだ。悪いけどこれは俺のワガママ。とはいっても、そう遠くないうちに結婚するかもしれないと報告を受けたんだ。そしたら俺たちも——』

交際三周年記念で、浩太が挨拶を匂わせていたことを伝えてすぐ、そんな嬉しそうな電話を聞いてしまつたのだ。

「それを聞いて、柊兄は私が結婚して家を出るのを待つてゐるんだって、気づいたの。……私、柊兄には早く幸せになつてもらいたい。だからできれば、別れたことは知らせないで、うまくやり過ごせたらなあと思つていたの。少なからず氣落ちしてしまうだろうし……安叔父さんが言つちやつたとは聞いたけれど、どうにかできないかなあつて思つてる」

静まり返る車内に、私の声が響く。

柊兄は心配だと言つて、ひとり暮らしを許してくれない。結婚や同棲を理由にしなければ、家を出ることは叶わないだろう。そして、柊兄にこの気持ちを打ち明けたところで、「楓はそんなことにするな」と流されてしまうのもわかつてゐる。

だから、無茶かもしれないが、安叔父さんが伝えてしまつた情報を訂正したいと思つてゐるし、どうにかこの流れのまま柊兄を結婚させてあげたい。嘘をつくのは心苦しいけれど、破局は叔父さんの早どちりで彼氏と同棲をすると偽つて家を出よう。できるかはわからないけど、柊兄にバレる前に早急に結婚を前提にお付き合いしてくれる人を探せばいい。

そろそろ柊兄には自分自身のことを優先して、幸せになつてもらいたい。

「楓は本当に、お人よしだな」

長い私の話を聞いてくれた奏君は、私の頭を優しくポンポンした。

「そんなことないよ……」

誰よりも柊兄を知る奏君なら、いい解決案を出してくれるような気がした。だから、打ち明けた

だけだ。

「とにかく話はわかつた……つまり、楓は早く自分が結婚して、柊にも結婚して幸せになつてほしいんだな？」

早く言えばそういうことになる。ひとまず私はコクリと頷いた。奏君が話を合わせてくれるなら、嘘をついてひとり暮らしすることもできそうだが、なんとなく協力してくれない気がする。小さいときから私の世話を焼いてくれた彼も、とても心配性だつた。でも、なんとか彼氏と同棲するといふことにして柊兄と住むマンションを出れば、柊兄は何の心配もなく結婚ができるはずだ。

「——なら、俺と結婚しよう」

「…………へ？」

またまた、思考が停止した。

続いて気が遠のくような気分になつた。

口を開けたままポカンとしていると、奏君は説得をするように続ける。

「別れたなら新しい相手が必要だろ？ なら俺にすればいい。俺なら気心が知れてるし、楓のことを誰よりも大事にできる。柊だつて俺になら安心して君を託してくれるだろ。以前の交際相手から俺が君を略奪したと言えば、自然だ」

聞き間違いではなかつた。それどころかおかしな事態になつた。

「いや、ぜんぜん自然じゃないよね……？」

「柊なら絶対に納得する」

「いやいや絶対にしないつて……」

「つていうか、私が納得できない。」

「俺以上に適任はない」

キッパリ言い切る奏君を畳然として見つめる。決意は固いようで、私の戸惑う言葉なんてぜんぜん聞いちやいない。こうなつてしまふと、彼が自分の意見を曲げないことを私は知つていて。

「奏君、結婚つて好きな人とするんだよ？」

「そんなの当たり前だろ？」

「私のこと、好きなの……？」

「じゃなきや、言うわけがない」

きちんとと考え直すように促したつもりだが、すべて冷静に即答されて大きく息を呑む。

奏君の眼差しはとても真剣だ。

会わなかつた七年の間に何かあつたのだろうか？ 私のいないところで、あんなことを言つていたのに……一体何がどうしてこうなつたの！？

だけど、浩太とあんなつてしまつた以上、新しい出会いを求めなければならぬのは、本当のことでもある。彼は柊兄の信頼できる親友で、幼馴染であるからこそ誰よりも私のことを理解しているし、常々大事にしてくれたことも覚えている。さらには、ルックスとスペックに至つては私にはもつたないほど最上級だし……叶わないと思つていた初恋の相手だ。私の恋心に気づいていた柊兄なら、絶対に突っぱねたりはしないだろう。

そして、私自身……今も同じ気持ちかと聞かれると答えるに困るが、嫌ではないなんて思つてしまつている……

そう。悪い話ではないと思うけれど――

それでも、苦しくて苦しくて、これ以上奏君の負担になりたくないくて、七年前に彼を拒んだのに……頭が追いかかない。

「楓……」

奏君の左手が、私の頬にそつと触れた。そして、視線を絡めたまま続けた。

「君がなぜ、俺の言葉をそんなに疑うかはわからないが……俺は、楓以上に大切なものなんてない。離れていた間もずっと君だけを思いながら過ごしてきたし、君を誰より幸せにすると誓おう。俺を選んで絶対に後悔はさせない――大人しく受け入れろ」

情熱的な告白に、心がふるりと震える。

まつすぐに私を見つめる、奏君の色素の薄い瞳。そこからは強い輝きが放たれている。
この七年の間で彼にどんな心境の変化があつたかはわからない。そもそも、彼のこの提案がどんな感情から来ているかもわからない。恋愛的なものなのか、親きようだいに対する親愛的なものなのか。もしくは、どちらでもないのか。

だけど、七年前に聞いたあの言葉は、何かの間違いだつたのだろうか……？

そう思えるほどに、自分でもうまく説明できない本能的な部分から、彼が嘘偽りなく口にしていることが伝わってくる。

そんな風に見つめられたら……

「……でも、奏君の気持ちは嬉しいけど、やつぱり無理だよ」

了承の言葉が喉元まで出かかつたその瞬間、もうひとつ重大な問題があることに気づいた。
「どうしてだ？」

私は、重い口を開いた。

「……さつき、私とセックスしても『悦くない』って言われた」
「……は？」

突拍子もない告白に、奏君の表情が一気に強張つた。

初めて見る表情に少しだけ躊躇したけれども、真剣に私を助けてくれようとする彼に、きちんと伝えなければと思った。

「私、あんまり濡れない体质みたいで……私自身も体を重ねることが気持ちいいと思えなかつたの。そしたら、相手もやつぱり悦くなかったみたいで……今日、会いに行つたら他の子と夢中になつてしまつた……」

思い出すのが辛くてうまく言葉を紡げない。それでも、勘のいい彼はこれが破局した理由であると察してくれただろう。彼の眉根が苦しそうに寄せられている。

「奏君の提案はありがたいよ。でも、結婚したらやつぱりそういうことをするだろうし……気持ちはどうでも嬉しいけれど、それ以上に、『嫌われたら嫌だな』って思つちゃつた……」

七年前、彼を拒んだのはこれ以上彼の負担になりたくない気持ちと、嫌われて突き放されること

への恐怖があつたからだ。奏君に浩太と同じような形で突き放されたら、私は今度こそ立ち直れないだろう。口にしているうちに涙が滲みそうになる。

「はあ～～～～！」

だけど、理由を聞くやいなや、奏君は大きく息を吐いた。そして、両手で頭を抱えて顔を伏せる。

「どうしたの？」

いきなりの行動に、ビックリして奏君を見つめる。

「君のそれは無自覚か……？　だとしたら本当にたちが悪い」

「へ？」

いつたい何のことを言つてゐるのだろう？

首を傾げたが、奏君は「いや、なんでもない」と言う。そしてまた大きく息をついたあと、気を取り直したように話を戻した。

「とりあえず、楓はとんでもないクズ男に引っかかっていたつていうのがわかつた。——だが、そんなど真に受ける必要はない。楓のせいではないだろう」

奏君は私の頭に手のひらを乗せると、優しい口調で言つた。

「奏君……」

「悦く思えないのは、君がオーガズムに達しないからだろう？　自己本位のセックスをして女性のせいにする男なんて相手にする必要はない。そんな男に楓はもつたいないし、渡せるか！」

あけすけなワードに頬が熱くなるのを感じながらも、心の傷を労わるような温かい言葉にふわつ

と涙腺が緩みそうになつた。

私を見つめる眼差しは、これ以上なく優しい。そしてじことなく熱を孕んでいるように感じる。そんな風に見つめられたら、勘違いてしまいそうになる。

「……俺なら、絶対に楓を傷つけたりはしない。問題があるならふたりで解決したいし、ひとりで悩ませたりしない。ベッドの上でだつて、君を何も考えられないくらいに蕩かして、俺しか見られないように甘やかしてやる……」

誘惑するような響きに、お腹の奥にじわりと熱を持つような感覚が走つた。

変わらない優しさと包容力の嵐に、胸の奥が熱くなる。

彼は昔から変わらない。勘違いしてしまいそうなほど甘く魅惑的な言葉で私を翻弄するのに、肝心な心の内は見せてくれない。七年前に彼の本心を聞いてしまつたはずなのに、また懲りもせずにその沼の中に引きこまれそうになる。

そして、あまりにも熱心に言い聞かされるものだから、想像してしまつた。

いつも私の頭を優しく撫でてくれる奏君の骨ばつた大きな手が、私の全身に触れて……心と体を翻弄していく様を。

ズクン……と熱くなつたお腹の奥から、とろりと何かがあふれるような感覚が走る。

やだ、これ……

初めての感覚に戸惑つて、きゅう……つと膝を擦り合わせていると、奏君が緩く口角を上げた。

「——楓、試してみないか？」

長く骨ばつた指が私の顎先に触れ、猫の機嫌を取るようすく上げる。

「試す……？」

「俺とのセックスで気持ちいいと思えたら、結婚しよう」

あからさまに説明され、全身が沸騰するよう熱くなつた。

——セツ……!?

うまく声を発することができなかつた。ぶつ飛びすぎた提案に、卒倒してしまいそつた。

奏君はそんな私を見つめながら続ける。

「俺はこの先どんな楓を見ても幻滅したりしないし、むしろ愛おしいと思う。何より俺には、楓をベッドでグズグズに可愛がつてやれる自信がある」

彼の形のいい薄い唇が今度は妖しく弧を描くのを見て、ゾクゾクした。

「……試してみる価値はあると思わないか？」

奏君の真摯な眼差しが、私の心の真ん中を射抜いていく。

……自信家な彼の、突拍子もない提案だと思う。普通なら「冗談でしょ？」と本気か疑うレベルだろう。でも、こうして真剣に考えてしまうのは、今まで彼の言うことになにひとつ嘘がなかつたからだ。

小学校のかけっこで一等賞を取つたらハグしてくれるという約束も、苦手な数学のテストで満点を取つたらクレープを食べに連れていくてくれるという約束も。どれもこれも、奏君のことが大好きだつた私のささやかなお願いだつた。けれど、奏君はどんなにバカげた約束でも無下にせずに、

ぜんぶぜんぶ守つてくれた。

七年前、彼の本心を聞くまで、私はたくさん彼に甘えていたと思う。

こんなのは、よくないつてわかっているのに……

固く閉ざされていた心を、説明のつかない何かが、まつすぐで熱い言葉とともににするりと解きほぐしていくのを感じた。

頬にあつた奏君の手が、答えを催促するように私の唇にするりと触れる。しばらく見つめ合つたあと、私は小さく頷いた。

「……わかつた。奏君の提案を……その、受けすることにする。その代わり、私がダメだつたとしておそるおそる確認する私を見て、奏君は花が綻ぶように笑つた。

「なるわけないだろ。大丈夫、約束だ。俺にすべて委ねろ——」

人形みたいに綺麗な奏君の顔がゆっくりと近づいてきて、そつと唇同士が合わせられる。

唇が触れ合つただけで、心が震えたような気がした。まるで初めてキスをしたみたいに、甘くむせ返るような心地が胸を占める。

「……俺の部屋に行こう。ゆつくり可愛がりたい」

意思を確認し合うように何度も口づけたあと、奏君が耳元で囁く。また、ズクン……とお腹の奥が熱くなる気配がした。

なんだか、体がいつもと違う……

私が真っ赤な顔で頷くと、奏君は車のギアを入れ替え、彼の都内の住まいへ車を走らせた。

◇◇◇

「楓……」

十五分ほどで元麻布もとあさぶにある奏君のマンションに到着した。奏君はまっすぐ寝室に向かい、大きなベッドに私をそっと導いた。

数日前に鍵を受け取ったばかりというホテルのスイートルームみたいな部屋は、段ボール箱が積み重なり、生活に必要最低限のものしか出ていない。そんな空間で体を重ねることに気おくれしたが、奏君が私の名前を呼びながら覆い被さりキスを始めると、そんな考えはなくなつた。

「そう、くん……」

彼の優しい香りと温もりが触れるだけで、不思議と強張っていた体から力が抜けるのを感じた。

「何も考えなくいい。俺から目を逸らさずに、俺だけを感じていろ」

奏君は私を見下ろすように膝立ちで跨がり、薄暗い部屋の中でネクタイを解いてスーツの上着とベストをバサリと床に投げ捨てた。シャツのボタンを緩めながら再び口づけをし、わずかにあつた不安さえも舌で絡め取つていく。

舌がじやれ合つて、ぴちゃぴちゃと生々しい音が響く。絡まり合つて、吸い上げられるとお腹の奥が熱くなつて、またとろりとこぼれるような心地を覚えた。

やつぱり、いつもと違う……キスが、気持ちいい。

私をこのまま食べてしまいそうなほどねつとり甘くて……触れられてもいらない部分が疼くように温度を上げていくのがわかる。そうして、滑らかな舌の動きに翻弄されていると、私のブラウスのボタンが外され、胸元に外気が触れる気配がした。

「背中浮かせて」

「あ……」

言われた通りにした途端、ブラウスが腕からするりと脱がされ、下着があらわになる。さらに、見えていく素肌にキスを落としながら、奏君は私のスカートとストッキングも丁寧に脱がしていった。

「ブラとショーツだけになつた私を、奏君が真上から見下ろし、呟く。

「綺麗だな……」

「どこか熱の籠つた視線に戸惑い、それとなく腕をクロスさせ胸元を隠した。

「そんなに、見ないで……」

ラベンダー色の上下セットの下着は、レースがふんだんに使われ自分でもお気に入りだ。たまたま今日この下着だったのは幸運だが、まさかこんなことになるとは思つてもみなかつた。

「こんなに可愛い楓を見逃すわけないだろう……どうせ今から隅々まで暴くんだから、隠すな」奏君は意地悪な顔でそう言うと、私の両腕を開いてシーツに押し付ける。それから背中に手を回しブラのホックを外すと、ふるんとこぼれ落ちた胸を両手でキャッチし、優しい力加減で揉みしだ

き出した。

「ああ……あつ、待つて……」

着々と事が進んでしまい、頭が追い付かない……

あまり大きくはない私の胸が、奏君の大きな手のひらに収まり、淫靡に形を変えている。包むようになに触れたり、いやらしく押しつぶしたり、こんな風に念入りに触れられるのは初めてだつた。

「ここも……早く、触れてほしそうだな」

奏君はひとしきり柔らかさを確かめたあと、いつしか中央でぶつくりと反応していた桃色の突起に顔を寄せた。

「あつ、んう……」

ツンと舌先で突かれたあと、指の腹ですりすりと優しく撫でられる。まるで羽根が触れるような感触がもどかしくて、背中が意図せず反ってしまう。

「あ、あつ、くすぐつた……」

「気持ちいいんだよ」

奏君はぺろりと舐めて告げたあと、突起を熱い口内に含んでちゅううと吸い上げた。びくつ、びくつ、と舌の動きに合わせて弾む体。

初めてではないのに、体感するものがいつもと違います。その波に困惑して心を落ち着ける時間が欲しいと思ったが、奏君は容赦がない。

吸い上げた先端を舌で転がし、わざとらしく歯を当てながらむしやぶりつく。反対側の乳房も、

突起を指で転がしながらしつこく可愛がられて、私は体を振りながら甘い声で悶えた。

「ああ、だ、め……なんかおかしい……つ」

キヤパオーバーとは、このことだろう。どうしたらいのかわからない。刺激を与えられるたびに、全身を甘く震わす媚薬のようなものが浸透してゆき、しだいに触れられていない下腹部が疼いて熱を持ち始めた。初めてのことに呼吸もままならない。

「もう、これだけでわかるだろう？ 楓はちゃんと“悦くなれる”体だ。相手が自己本位だつただけ、楓にはなんの落ち度もない」

「そう、くん……」

思わずうるつと、目頭が熱くなる。

浩太との経験しかないが、今までたいして愛撫がないまま挿入されて、苦痛で早く終わつてほしいと願うばかりだつた。

だけど、今は違う……

温かい手で、唇で、手のひらで。蕩けるような愛撫を執拗に繰り返されている。余裕のなくなつてきた私をうつとり見ながら、奏君が胸の引っかかりを優しく取り除いてくれた。

「まあ、相手がバカな男で俺は命拾いしたがな」

よく聞こえなくて「え？」と首を傾げたが、奏君は微笑んで私の眼をじつと見つめ尋ねてくる。

「——で？ このあと、どこに触れてほしい？」

熱く欲を秘めた瞳が私を捉え、お腹の奥が震えた。

意地悪なのに甘くて、まるで誘惑するような言葉。

私は、顔が熱くなるのを感じながら、正直にお願いした。

「もっとその、触つて……ほしい」

胸だけじゃなく……下も……

ごによごによと真つ赤になりながら呟くと、

「よく言えました」

そう嬉しそうに言つた奏君はご褒美にキスをくれ、ショーツの上からクロッチの部分に触れた。

「あ……」

くちゅ、と粘着質な音がする。

「す、ぐ濡れてる」

奏君は指先で上下に滑らせながら耳元で囁く。湿つたクロッチで、さらにあふれてくる蜜をく

ちやくちや練つて弄ばれた。

「んう、こんな、初めてで……」

俗に言うテクニックというものなのか、相性というものなのか、経験の浅い私にはわからないが……奏君に触れられると、そこからアイスのように溶けてしまいます。

ソコを撫でまわす指使いにいつぱいいつぱいになりながら口にすると、奏君は上半身を起こして私の腰をぐいっと引き寄せた。

「当たり前だ……他の男とは年季が違うんだ」

年季？ と疑問に思つたが、口にする間がなかつた。

「ひああ!?」

ショーツを引きずり下ろされて、太腿を割り開かれた。

「な、なにして——」

やだ、丸見え……つ。

「大丈夫だから身を委ねろ」

奏君はそう言つて私をなだめると、脱がしたショーツをぱいつとベッドの下に落とし、開いた足を天井に向けて大きく広げる。そして、私を見て意地悪に微笑むと丸見えになつた足の間のソコに顔を近づけた。

「つ、だめえ……」

知識として知つてはいるけれど、されるのは初めてだ。恥ずかしすぎる光景にきゅうつと目を閉じてしまう。だけど、所詮奏君に勝てるわけもなく。

「あ、ああつ……んう——」

彼の舌がにゅるりと秘部に触れた。音を立てて舐め始める。

上から下に蜜を拭うように念入りに舌を這わせ、縁どるように花弁を舌でなぞられた。熱い舌の感触に脳が陶酔し、腰がカクカクと震えた。

「ああ、ダメつ、なのい……」

眩暈を起こすような甘美な刺激に、無意識にいやいやと頭が横に揺れる。どうしようもなく気持

ちがいい……

「ダメと言つても、蜜を垂らして誘つているな」

意地悪な言葉に羞恥したそのとき、蜜の入口を念入りになぞつていた舌が、ぐぐつとナ力に挿つてきた。

「ふあつ!? あ、ああつ……そう、くん……つ」

一瞬何が起きたのか理解が追い付かなかつた。ずぶつ、ずぶつと舌を押し入れられて、あふれた蜜を音を立てて吸い上げられた。頭の芯がとろりと蕩け、体の奥からさらにあふれてくるのを感じる。そのまま、また舌を押しこまれて、ナ力をしつこく蹂躪じゆうりんされた。

「ああ……だめ、どんどん、なんか——」

下腹部に切羽詰まつたような、何かが押し寄せてきた。

「悦きそうだな」

ふちゅつと秘部から彼の唇が離れ、独り言が耳に届く。それと同時に、蜜口を開いていた指が入口をそつと上下になぞつたあと、ゆっくりナ力に挿つてきた。

「ふあつ、ああ——……」

内壁を擦られる感覚に、体中の血液が騒めいた。長い指がずつぶり付け根まで埋められると、お腹の奥からずくずくとナ力が湧き立つのを感じる。

「すごい、とろとろ……」

そのまま奏君の長くて綺麗な指が、ナ力を擦り上げる。はじめは優しく撫でるように、じきに搔

き混ぜて弱点を探るように。指が二本に増えると、お腹への圧迫感が増した。

「ああつ、はあ……なんか、へんに、なる……」

何か、大きくて、弾けそうな、巨大なものが押し寄せてくる。味わつたことのない不思議な衝動に怖くなつた。

「大丈夫だから、安心して達け」

奏君は腕に縋りつく私の唇を優しく食はむと、安心させるよう抱きしめ、くちゅくちゅとナ力の指の動きを早めた。お腹の奥を搔きむしられるような、不思議な快楽に自然と足を広げてしまう。甘えるような声を上げて、シーツを蹴りけながら悶えた。

トントンと一番奥をノックしながら優しく擦り上げられて——

「ふああああ……！」

ビクン！ と体中に電流が走つたような甘い衝撃が行き渡り、体が大きく反り返つた。頭の中が真っ白になり、恍惚とする。

「はあ、はあ……」

全身の力が抜けてくつたりした。

脱力した体を労わるように、奏君がしつかり抱きしめてくれた。

「達つたな、可愛い」

……とてつもなく大きくて、弾けるような快感だつた。達くつて、のことなんだ。初めてで、ビックリした……

こくんと頷くと、奏君は満足げに微笑み上半身を起こした。

「でも、まだ終わりじゃないぞ？」

奏君はそう言つて、着ていたシャツとスラックスを脱いでベッドの下に落とした。

あらわになつていく体から、目が離せなかつた。

彼は昔から忙しい合間を縫つてランニングやジムで体を鍛えていたのだが、今もそれは変わらないようだ。逞しい胸板としつかり割れた腹筋、まるで彫刻のような裸体にうつとり見惚れてしまう。

眉目秀麗な上に、こんな体をしているなんて、本当にずるいと思う。

彼がボクサー・パンツを脱ぎ捨てると、腹筋のその下の……すでに臨戦態勢になつた大きな彼のモノがぶるんと飛び出てきて、思わず目を剥いた。

血管を浮き立たせ天井を向くソレは、私が知るよりも大きくて立派で……無意識に喉が鳴る。

奏君はここに来る途中にドラッグストアで買った避妊具を装着して、私の腰を抱えた。

「挿れるよ」

額くと、グズグズに蕩けた蜜口に熱くて硬いものがあてがわれる。そして、ゆつくりと押し進められた。

「ああ、んう————」

ズブズブ……と内壁を搔き分け、硬くて大きな熱の塊がナカに挿つてきた。

苦しいくらいに圧迫感を感じる。けれども、柔らかくほぐれた内壁は、頬張るように嬉々として彼の欲望を難なく飲みこんでいく。

が走り出す。

「痛くないか？ 少しキツイな……」
根元まで挿れて体がピッタリくつつくと、奏君は私を抱きしめて頭のてっぺんにキスをした。なんだかその表情がとても苦しそうに見えた。

「だい、じょうぶ……奏君のほうが」
言いかけると、奏君は困つたようにため息をついた。

「いや、俺は……悦すぎて、保てるか心配になつていただけだ」
彼は口角を上げると、「動くぞ」と言つて、腰を引いてゆつくり動き出した。

「あ、あつ、あ————」

二度、三度、馴染ませるように動いたあと、彼は本能に突き動かされるように私のナカを抉り出した。

はじめは蜜窓を押し広げるように。しだいに雄芯が抜けるギリギリまで腰を引き、新しく生まれた愛液をまとつて柔壁を突き上げる。ズン！ ズン！ と腰を穿たれるたびに、頭の中で火花が散り、自分のものとは思えないほどの甘い嬌声がこぼれた。

「ああっ……んあっ！ あつ、あつ————」

昔から余裕たっぷりで、私を意地悪に翻弄する奏君が、初めて見る男の顔で夢中で腰を打ち付けてくる。たまらなく扇情的で、あんなにセックスに悩んでいたのが嘘のように、私は奏君に縋りつけられた。

いて喘いだ。

「そんなに食い締めると、俺がもたないぞ……」

私を見下ろして、奏君の目が意地悪く細まつた。

「ひやあん！」

膝が胸に付くほど太腿を大きく広げて持ち上げられ、腰を穿たれる。ぐぐつと、子宮が持ち上げられるのを感じ、くらりと眩暈がした。

これ……深いつ。

じゅぶ、じゅぶ、と蜜を搔き出しながら出し入れをされて、脳芯を震わせるような刺激が全身にもたらされる。逃げようにも、全身で圧しかかられ身動きが取れない。何度も繰り返されているうちに、さつき感じた大きな波がお腹の奥からせり上がりてくる気配がした。

だめつ、これ……つ。

「楓、顔が蕩けてる……」

奏君が、膝の間で無防備に揺れていた両乳首を摘まんで、指で転がした。

「ああっ、んあ……またつ、きちゃあ……つ」

「遠慮せずに達け、ふたりで悦くなるのがセックスだ」

私のナ力を持つスピードが加速し、肌と蜜の触れ合う音が大きくなる。

熱い塊でナ力を犯しながら、乳首を無遠慮に捏ね回される。

意識が遠のきそうなほどの気持ちよさに、しだいに目の前でパチパチと光が爆ぜるようになつた。

「ああああっ……！」

お腹の奥から押し上がつてきた熱いものが決壊し、全身を巨大な快楽に包みこまれる。胎内がぎゅうぎゅう収縮して、痙攣するのを感じた。

「まだ、意識飛ばすなよつ……！」

だけど、奏君の動きは止まつてくれない。

「ふあ!? あああっ！ やあつ、とまつてえ……つ」

達つた。達つたのに……！ もちろん、なつちやう……！

奏君は、逃げようとする私の腰を押さえつけでは、さつきよりも熱くなつた雄芯を容赦なく突きこんでくる。

「俺ももう出る……もう少し頑張れ」

懇願する私に、彼がサディスティックに微笑む。また、ぎゅんと下腹部が熱くなるのを感じた。

「んあ、あつ、でもつ——ひやつ！」

奏君は激しく腰を打ち付けたまま足の間に手を伸ばし、まだ達つたばかりの肥大した花芽を、親指でコリコリと刺激する。

「楓——ちゃんと“約束”は守つてくれよな？ もう絶対に、俺から逃がさない」

もう何も、考えられない……

私は再び胎内を大きく痙攣させ、ひと際甘い嬌声を上げた。

同時にナ力の奏君が、熱いモノを吐き出すのを感じる。

温かくて、心地よくて、言いようのない充実感が私の心を満たした。

「俺だけを見ている——」

遠のいていく意識の中で、そう聞こえてきた。

——もう、望んではいけないと思っていたのに……どうして私の前に現れて、こんなことをするの……

甘美な魔法の言葉が、私の心の扉をこじ開けようとする。

彼の気持ちが理解できないまま、優しい腕に包まれ私は意識を手放した。

第二章 絶対に逃がさない Side 奏一

荒ぶる呼吸を整え、汗ばんだ柔らかな体を隙間なく抱きしめる。

腕の中で意識を手放した彼女の頬に、何度も口づけた。

——やつと、ここまで来られた。

素っ裸で縋るように彼女を抱きしめる俺は、なんとも滑稽かもしぬないが、それほど感慨深いのだ。

……人間誰しも、後悔というものをしたことがあるだろう。

九条奏一にどつては、目の前の木下楓こそが、後悔の象徴だった。

七年前に碎け散った恋をどうしても諦めきれない俺は、この好機をどうしても逃すわけにはいかなかつた。

「……楓、もう絶対に逃がしてやらないからな」

腕の中で眠る彼女を見つめながら、出会った頃を思い出した。

◇◇◇

立ち読みサンプル はここまで

楓に出会ったのは、彼女が幼稚園に入園したての頃。当時、俺は九歳だった。大企業の取締役を親に持つ俺は、とても裕福だったが、寂しい思いをして育ったのをよく覚えている。

世話役の家政婦がいたが、両親が仕事でほとんどいない広い家は、温かみがなくもの寂しかった。小学校低学年の頃は下校時間が近づくたびに、心で何度もため息をついて事務的な家政婦しかいなない家に帰る心の準備をしていた。

そんな俺に声をかけてきたのは、その年初めてクラスが同じになつた、今では無二の親友——木下柊だった。

「え？ 奏一、帰つてもお手伝いさんしかいないのか？ つてか、お手伝いさんて、なんだ？ ……まあ、いいや。暇ならみんなでサッカーしようよ！ 奏一、勉強もスポーツも得意だよな！」人懐っこい柊はちよつとひょうきんなところがあるが、周囲をよく見ていてクラスでも人気者だつた。

無愛想と言われ、どこかクラスメイトから一線を引かれていた俺だが、柊の手に導かれようやく仲間に入つていけた。

俺たちは、馬が合つたのだろう。時間さえあれば一緒に過ごすようになり、気づけば放課後の交流も増えていった。

「本当に、遊びに行つていいのか……？」

グラウンドや図書館など、さまざまな場所でともに過ごしたが、自宅に遊びに行くのはしばらく

経つてからだつた。

この頃は気づかなかつたが、家に帰つてもつまらないと言つた俺を、柊なりに気にかけてくれていたのだろう。

「うん。母さんが、真夏は暑いからうちで一緒に遊んだら？ つて言つてた。奏一の母さんにも、今度言つておいてくれるつて。あ、でも、妹が小さいから邪魔しにくるかもしれないけど、許してやつてね。楓は世界一可愛いから」

自分の妹をそんな風に言う柊は、この頃からシスコン……いや、妹思いの性格だつた。

正直、人見知りで人付き合いが得意ではない俺は、妹だけではなく、柊の家族みんなに失礼のないよう振舞えるか不安だつた。

だが、木下家に着いた途端、それは杞憂だつたと思えた。

社交性を人型にしたようなご両親に、その後ろからひょっこり顔を覗かせる小さな幼稚園の制服を着た女の子。

ぷっくりした白い頬と、人形みたいな大きくてキラキラした眼。小動物みたいで愛らしいと思つた。

柊が「ただいま」と言つて、泣いて嫌がる楓を抱きしめ、キスをしようとしていたことにはドン引いた。だが、家に帰つても両親がいない環境で育つた俺には、木下家の温かさは羨ましく、とても居心地よく感じた。

それからといふものの、柊とご両親の提案で、俺は木下家で過ごす時間が増えた。